



Title	義歯へのカンジダ付着に関するリスク因子の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	尾崎, 公哉
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第13861号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78502
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kimiya_Ozaki_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（歯学）	氏名	尾崎 公哉
審査担当者	主査	教授	山崎 裕
	副査	教授	横山 敦郎
	副査	教授	北川 善政

学位論文題名

義歯へのカンジダ付着に関するリスク因子の検討

審査は、主査、副査を含めて公聴会として行われ、論文提出者が論文内容の要旨を説明した。その後、内容について審査担当者が質問し、論文提出者が回答する形で進められた。以下に論文内容と審査の要旨を述べる。

義歯は口腔カンジダ症の重要なリスク因子の一つであり、口腔カンジダのリザーバーとなっている。義歯へのカンジダ付着の関連因子が把握できれば、高齢者の義歯管理に役立つ義歯性口内炎の予防を通して誤嚥性肺炎の予防にも寄与すると思われる。

第1章ではカンジダが新義歯に付着するまでの期間とその関連因子を検討した（北大病院自主臨床研究 014-0054）。対象は当科で口蓋全体を被覆する新製上顎義歯を装着後に、12か月に亘って定期的に経過観察が可能であった32例（男性11例、女性21例、平均年齢69歳）を対象とし、方法は新義歯装着時およびその後1、3、6、9および12か月に①義歯粘膜面、②義歯床下粘膜、③口内リンス液の3箇所から検体を採取し、クロモアガー培地で培養後、菌種とコロニー数（CFU/ml）を測定し、関連因子を統計学的に解析した。関連因子は年齢、性別、既往疾患数、常用薬剤数、安静時唾液分泌量、柿木分類、義歯の既往、下顎義歯の有無、義歯清掃状況、義歯装着時のカンジダ保菌の有無、ならびに一般総細菌数とした。

結果については上顎義歯を新製・装着した32例中、新義歯装着後1年間に19例（59.4%）が義歯粘膜面からカンジダが検出され、うち15例は新義歯装着後1か月であった。1年間に亘ってカンジダが義歯粘膜面から1度も検出されなかったのは、13例（40.6%）であった。新義歯装着時に口蓋粘膜および口内リンス液の両方からカンジダが検出された群においては、両方から検出されなかった群に比べ義歯粘膜面からのカンジダ検出率が有意に多い結果であった。また、義歯へのカンジダ付着が安定しなかった8例を除き、カンジダ付着群11例と非付着群13例で関連因子を比較検討したところ、柿木分類による口腔乾燥、義歯清掃状態、新義歯装着時の口蓋粘膜または口内リンス液からのカンジダ検出の4項目で有意差を認めた。

第2章では、第1章の関連因子のなかで有意差を認めた4項目中、新義歯装着後に介入が可能な義歯の清掃管理（就寝前の機械的清掃＋義歯洗浄剤）を義務付けた。対象は当科で新製した口蓋全体を被覆する上顎義歯を装着後に、6か月に亘って定期的に経過観察が可能であった22例（男性8例、女性14例、平均年齢72歳）とした。第1章と同様の方法及び関連因子を検討し、経過観察期間は1、3、および6か月とした（北大病院自主臨床研究018-0277）。結果については、関連因子に関するすべての項目で、第1章と第2章の間には有意な差を認めなかった。新義歯装着6か月間に、義歯粘膜面からカンジダが検出されたのは22例中4例（18.2%）であり、第1章の研究の56.2%（18/32）と比較し有意な差を認めた。検体別では、新義歯装着時に、口蓋粘膜および口内リンス液の両方からカンジダが検出された群は6例で、その後6か月間に義歯粘膜面からカンジダが検出されたのは、1例であった。それに対して、両方の検体からカンジダが検出されなかった群は7例であり、いずれにおいても6か月の観察期間内にカンジダは検出されなかった。新製上顎義歯装着に際し、義歯の清掃管理を徹底し継続することで、義歯のカンジダ付着を明らかに抑制することが検証された。新製上顎義歯装着時、並びにその後の定期観察時において、適切な義歯の清掃管理指導をおこなうことが義歯性口内炎予防に有効である可能性が示唆された。

上記の論文内容及び関連事項について、以下の項目を中心に質疑応答がなされた。

1. 検体採取部位を切歯乳頭部周辺にした理由ならびに義歯装着下にリンス液を採取した理由について
2. 常用薬剤と既往疾患の評価法ならびに関連因子を多変量解析しなかった理由について
3. 旧義歯のカンジダ付着状態を検索しなかった理由について
4. カンジダ菌種の単独菌が減少し、混合菌が増加した理由について
5. 第1章における義歯の清掃管理指導が第2章の義歯清掃管理にバイアスを与える可能性について
6. カンジダと誤嚥性肺炎の因果関係について
7. 一般総細菌数における第1章と第2章の違いに関して
8. カンジダが口腔内に保菌されていない場合は、義歯清掃とは関係なく義歯からカンジダが検出されない可能性ならびにカンジダが検出される場合の由来について
9. 研究の最終目標及び今後の研究の展望について

これらの質問に対して、学位申請者から明快な説明と回答が得られたとともに、今後の研究に対する展望が示された。

学位申請者は、義歯に付着するカンジダについて、カンジダが新義歯に付着するまでの期間とその関連因子を検討し明らかにした。また新義歯装着に際し義歯の清掃管理指導を行い継続することで、義歯へのカンジダ付着を抑制することを明らかにした。本研究の内容は、高齢者の義歯性口内炎の予防に寄与するものと評価され、学位申請者は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定された。